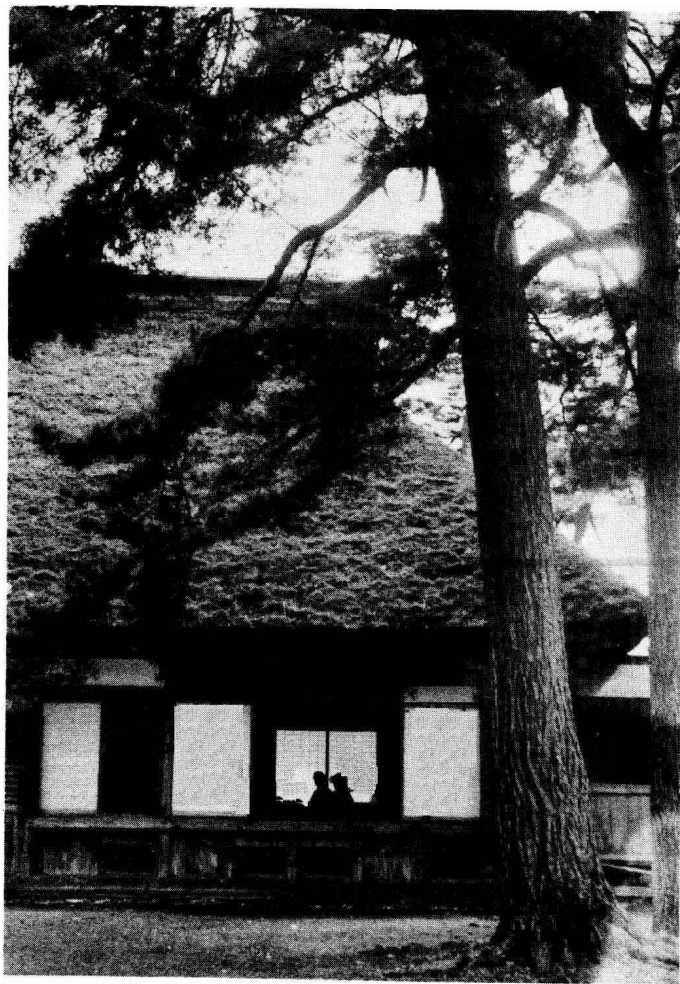


民話の平泉

朴沢謙一郎著

民話の平泉



朴 沢 謙 一 郎

編著者略歴

大正8年10月8日 岩手県久慈生，花巻市花城小学校，県立一関中学校（現一関第一高等学校），岩手師範学校 卒業。遠野市青笹小学校，釜石市箱崎小学校，西磐井郡平泉小学校，戸河内小学校，平泉中学校，長島中学校，小島小学校，一関市桜町中学校，気仙郡三陸町綾里小学校に勤務。

住 所 岩手県西磐井郡平泉町平泉字坂下1（〒029-41）

著 書 童話集「子供の原っぱ」「雪の子供会」「月と星」

民 話 の 平 泉

昭和45年1月14日 第一版印刷・発行

昭和45年9月15日 第二版印刷・発行

昭和47年7月1日 改訂第三版印刷

昭和47年7月1日 発 行

頒価 700円

著者承認検印省略

編 著 者 ほお ざわ けんいち ろう
朴 沢 謙 一 郎

発 行 者 朴 沢 トモ子

印刷・製本 一 関 プ リ ン ト 社

岩手県一関市青葉町一丁目7の24
（〒021）TEL一関(3)4586

「民話の平泉」の刊行に際して

岩手医科大学教授 小松代 融 一

明治も末年のころであつたろうか。祖母の懷ろにいて、毎夜のように繰返し聞かせられた話。それはただ恐ろしい調子の物語りであつたが、懷ろにいる安堵感からか、それを聞きながら眠りに入つたのであつた。ことばも調子も胸にありながら全く口に出して言えない遠い記憶である。

祖母は疱瘡をやみ、六つの年に失明したので、おかみさま——いわゆる口よせを業としていたから、話の種に不自由はしなかつたようである。

祖母は私の小学校四年生の冬に亡くなったが、祖父（繼祖父）がやはり盲人であつて、記憶力の強い人であり、とくに奥淨瑠璃については名手であつたようである。

私は祖母の昔話——「糠福と紅皿」とか「馬鹿婿」の話よりも、「義経東下り」の「熊坂長範」など勇壮な章段や、「餅合戦」などに興味をもち、しばしば祖父の膝の上や肩に乗つていてこの淨瑠璃をせがんで聞いたものであつた。祖母の死後二年ほどで祖父と別居してしまつたが、これは年令のせいもあつてか、章段の部分々々を僅かに記憶し曲節もいくらか口を吐いて

出て来るが、戯れの耳覚えであるから、きわめてたゞたゞしいものである。

現在、無形文化財の一関北峯清一老などよく私の家を訪れて、部落の人たちを集めて八人芸など披露したものであったが、老の奥浄瑠璃は祖父の影響があったと私は見ている。

さて私の昔噺しの記憶は至って淡いものであるが、成長するうちに言語——特に生活言語——方言に関心を持つようになってから、日本人の生活、中にも地方避地寒村を訪ねまわることが多かったのも、いつのまにか民俗のもの珍らしさ、その奥深さに心を引かれ、柳田国男先生などの御著を通じて、自分の生活を顧みたりして、ああ、あのころにもっとしっかり記憶に止めておくべきだったと悔やまれてならない。

この岩手陸中の土地は、相手の期間、未開山猿の住家のように中央の人々に思われていたのであったが、柳田先生を介しての佐々木喜善氏の「遠野物語」以来、民俗昔噺しの宝庫として改めて見直される時代が来たのであった。佐々木氏は「江刺郡昔話」を始め、「老嫗夜譚」「聴耳草紙」「農民俚譚」、あるいは「上閉伊郡昔話」や「紫波郡昔話」など次々に発表され、日本民俗学の発展に大なる貢献をしたのであった。

昭和十五年の交、郷土教育が盛んになるや市町村部落毎の郷土誌の編集が行われ、一時は「郷土」という言葉を冠しない教育などは黙殺されるまでになった。その中で必ず採り入れられ

ているのが「昔噺し」であつたのは言うまでもない。

近年科学文化の異常な進歩に伴ない、人間疎外の傾向が指摘されるようになった。兎が餅を搗いている月、かぐや姫の住んでいる月、そしてわれわれ人間——日本人——には仰ぐべく懐かしい月が、二十五億年前に死塊となつた物質であつたとなつた今日、人々は荒涼たる精神の世界に孤独な存在となり果てようとしている。また囲炉裡のほた火を囲んで昔を語り耳を傾けて、夜の更けるのも知らなかつた人と人との温い心の交流も、今や語る人も聴く人もばらばらになりつつあるのではないか。

私は文明の名のもとに失われて行きつつある仲間どうしの親しみや睦みが惜しまれてならない。

このような時代に郷里の篤学の教育者朴沢君のような人がいるというのは、まことに有り難いことである。君とは鉄道踏切り一つを距てた近隣で、私とは師弟の間柄でもある。君は、その教育の職を郷里やその周辺に奉じながら、こつこつと学問に励むとともに地元の老爺老婆から小暇を割いて昔噺しの聞きとりを続け、その都度私費出版をして貴重な伝承の衰亡を防ぐべく努力を重ねてこられた。私がコトバに専心して、心にかけてながら果すことのできない仕

事を黙々として実現してくれたのである。

聞き取りの作業は容易でなく、その表記法また尋常の業ではない。よくこれまで募集整理されたと思う。

この昔噺しには、どこかで何かで見聞いたことのあるような、いわゆる独特でないものが多く、また「そのところは自分の知っていると違う」と思われる人が少くあるまい。それが伝承としての昔語りの特色なのである。

親切に君のために話をして呉れた人たちも、そして私も君もいずれは過去の人となる日はあっても、この苦勞の成果はいつまでも郷土や知人の心の糧として残るに違いないと信じている。

昭和四十四年八月二十八日

民話集発刊を祝して

元西磐井地方学校図書館協議会長

佐藤 正蔵

豊かな緑と太陽の中に幾百年となく育つて来た民話、その内一関平泉地方の民話を広く後世に伝えようとの念願から、朴沢謙一郎先生が自分の足と耳で採集した民話集「民話の平泉」を発刊することになったのは、大変意義ある事であると思ひ喜びに堪えません。

民話は、故里の庶民の歴史とも考えられます。そこに住む人たちの夢、機智、生活、人間性等々が、山川の自然とよく調和し、いつ誰が作ったともなく、「自然に生れ出たもの」でありそしてそれが文学であり、哲学であり、宗教であり、庶民の歴史であると思われまふ。母の懐にいだかれながら、また家業の手伝いをしながら、あるいは祖母のひざを枕にしながら、民話で育つたわたくしたちは、心の故里として民話になつかしさを覚えるのです。

現代の社会は科学技術の発達が進み、人類は神秘の世界とされていた月面に立ち、月の岩石が地球に運ばれて来ました。このようなこれからの時代にこそ、わたくしたちはわたくしたちをはぐくんでくれた故里の山川を顧み、ほ、えましい故里の民話を味わうことが大切で

はないかと思うのです。そこには、人類の故郷の味がかみしめられるでしょうし、それがまた人間性再開発のよすがともなるでしょう。

朴沢先生が二十年間の才月をかけて採集したこの民話は、どんなに子供たちや若者たちの魂の中に浸透し、彼等に心のやすらぎを与えるかはかり知れないものがあります。

皆さんにぜひ一読されることをお奨めし、朴沢先生の偉業に対しあらためて敬意を表します。

一九六九年秋の夜

目次

民話の平泉によせて

東京大学名誉教授

岩手医科大学教授

西磐井地方学校図書館協議会長

藤島亥治郎先生

小松代融一先生

佐藤 正蔵先生

囲炉裏の火にあたつて

婿 話

西風山の化物

唐獅子とカミソリ

不帰鳥

果 報

弘法大師の書

てんしき

7
9
11
14
17
19
21
24

小判のはじまり

鼠 穴

菖蒲湯の由来

菜を洗う小娘

婿ばなし

御守判官てるての姫

米の中の三両

乞食坊さん

きのこ地藏の話

平泉夜話

続平泉夜話

蘇民祭

金鶏山

弁 慶

納 豆

26

28

31

34

37

43

47

50

51

55

73

79

81

85

87

仙人境

悪路王物語

猫塚の由来

山伏石

小松の姫

経塚婆

溜池の主

八方島伊惣右エ門

きのこ地藏

なぞなぞなんぞ

瓜子姫子の話

信太の森の葛の葉

盲になった蛇

萩八束

89

92

97

107

110

113

115

117

122

127

137

139

144

147

下戸のぶった倉

扇屋お鶴

ゼニゴとマセゴ

栗の毬

末娘と猿

瓜子姫子

蛙と赤腹

猿のくれた着物

かっぱの話

男石女石

どぶろくの話

化粧坂

和尚と小僧

掃部長者

鼻穴のない仏像

199 196 194 192 189 187 185

184 179 173 168 166 157 154 150

カッパの話

鹿踊りのはじまり

蕎麦神と福の神

鼻曲がり地蔵

えんつこもんつこさつけあった

219

民話採集覚書

序章 民話というお話

221

第一章 民話のひらいずみ

223

第二章 民話の誕生

224

第三章 囲炉裏のそばで

273

第四章 民話は永遠に

280

終章 新民話誕生の為に

285

あとがき

306

この民話の本を遺産として、
子どもたちに贈ります。

囲炉裏の火にあたつて



今あなたは、テレビも時計も新聞も
ハイヤーもゴム長靴もミニスカート
も電話もストーブも学校もなかった
昔々の長い冬の夜、ランプの下でお
爺さんお婆さんお父さんお母さんと
一しよに囲炉裏の火にあたっている
のです。

(写真は、東稻山麓)